

●第45回日本てんかん学会の開催に当たって

てんかん診療のゴールド・スタンダードを求める新たな一歩

会長 かめやま しげき 亀山 茂樹(国立病院機構西新潟中央病院 院長)

来る2011年(平成23年)10月6日(木)、7日(金)の2日間、新潟市の朱鷺メッセにおきまして、第45回日本てんかん学会を開催させていただきます。

3月11日に発生した東日本大震災に続く巨大津波、福島原発事故によって、亡くなられた多くの人々のご冥福をお祈りすると同時に、被災された人々が1日も早く通常の生活ができるようになることを願ってやみません。

この大震災には、てんかん学会、てんかん協会をはじめ多くの方がてんかん患者さん達のことを最優先に考えて、現地ですばやい診療援助や抗てんかん薬の供給活動を行ったことが賞賛されています。今後も、学会として長期にわたる震災復興対策や援助の継続が計画されています。大震災の年に開催される学会ということから急遽、「東日本大震災に際して」という特別パネル展示を企画しました。てんかん学

会やてんかん協会がどの様に行動し、どのような役割を担ったかを伝えていただきます。また4月18日、栃木県鹿沼市の交通事故で多くの児童が犠牲になり、運転手のてんかん発作が原因であることが判明して、てんかん患者の運転免許が社会問題化しました。てんかんという病気とそれをもつ患者を“out of the shadows”に出したいと活動してきたてんかん学会や協会がさらなる行動計画を策定する必要に迫られています。「てんかんと運転免許」に関する講演を第1日目と学会翌日の第6回てんかん学研修セミナー、市民公開講座でもお願いしています。

日本てんかん学会は、てんかんの診断と治療に関連する基礎的、臨床的研究の促進と成果の普及を図ることを目的とした学会で、約2,200名の会員を有しています。1967年に第1回日本てんかん研究会として結成されて以来、年1回学術集会在開催され、1979年以降

日本てんかん学会として長い歴史を刻んできました。本会には、てんかん診療を担う精神科、小児科、脳神経外科、神経内科に加えて、てんかんの基礎研究に携わる多くの研究者も参加して、てんかんの包括的な病態解明と治療法の確立を目指しています。てんかんは、人類の最も古い病気の1つであり、国内に100万人の患者がいることが推定されています。近年、遺伝子研究や病態生理研究、新しい薬物治療や外科治療の進歩など診断・治療が飛躍的に発展している分野です。

本学会では、近年ガイドラインの編纂も行われ、エビデンスレベルの高い診断・治療が求められるようになっていく現状を踏まえて、新しいてんかん学を構築するために、3つのシンポジウムと2つのワークショップでも討論を深めていただき「診断治療のゴールド・スタンダードを求めて」という大きな目標にむかって、今年は新たな第

一歩になるような学会にしたいと思えます。新潟では、38年ぶりの開催になります。多くの先生にご参加いただき活発な議論をお願いしたいと思っています。

震災直後の沈滞・自粛ムードで一般演題登録の出足が悪く心配しましたが、最終的に306題の一般演題が採択され、口演37セッション(183演題)、ポスター19セッション(123演題)を組むことができました。一般演題の中には、震災関連、運転免許関連などの演題も含まれていますが、新薬関連が例年以上に多いのも特徴です。また、若いてんかん外科医の増加を反映して、てんかん外科関連の演題も増えています。

2つの特別講演は「新てんかん分類」と「てんかんとうつ」を取り上げました。2つの教育講演では会員からの要望が多かった「画像診断」と「脳波判読」をお願いしました。交互に開催している日韓てんかん学会の合同シンポジウムとして第4回KES-JES Joint Symposiumを開催して両国のてんかん学を刺激し合うと共に友好も深めることを予定しています。新潟らしい企画として文化講演「朱鷺再生への道のり」と特別企画講演「中田瑞穂の「Neuro-Gliology」からみた「てんかん2000年」」を予定しています。

以上、本学会の開催に当たり、ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。